

## 第29回防衛問題セミナー

平成27年7月6日（月）

### 【司会】

お待たせしました。定刻となりましたので、第29回防衛問題セミナーを始めさせていただきます。

私は本日の司会を務めさせていただきます九州防衛局地方調整課地方協力確保室長の鶴田でございます。どうぞよろしく申し上げます。本日は御来賓として、衆議院議員山本幸三様の代理として花田秘書様、同じく、武田良太様の代理として武末秘書様、参議院議員松山政司様の代理として酒井秘書様、河野義博様の代理として清水秘書様に御臨席いただいております。改めて御礼申し上げます。

まず初めに、主催者を代表しまして、九州防衛局長 川嶋貴樹より御挨拶させていただきます。

### 【川嶋局長】

本日は雨が降る中、大勢の皆様にご来場を賜りましてありがとうございます。私は、防衛省九州防衛局長を務めております川嶋と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

九州防衛局というのは、九州管内にあります自衛隊或いは在日米軍の施設等の管理を主として行っておりますが、もう一つ重要な仕事がございます。それは地域住民の皆様、防衛省・自衛隊の置かれた現在の状況等をご理解いただき、防衛省・自衛隊に対する御支持等を賜ることです。その一環といたしまして、防衛問題セミナー等を開催させていただいております。この防衛問題セミナーは、平成19年から開催しておりますけれども、本日で29回目ということになりました。多くの皆様にご来場を賜りまして、大変感謝をしている次第でございます。

本日の講師は、西部航空方面隊司令官でございます。西部航空方面隊というのは、九州管内を含め我が国の防空作戦、航空作戦を担当しており、まさに国防の最前線に就く方に話をさせていただくことになっております。

また、今回は西部航空方面隊司令官の御協力を得まして、初めての試みとした講演会と音楽会をコラボしたセミナーとなっております。

第1部は、日本の国防の最先端に立つ司令官に国を取り巻く状況や航空自衛隊の置かれた現状・役割を御説明していただきます。第2部では、航空自衛隊の西部航空音楽隊による演奏をしていただきます。第1部も第2部も防衛局として全力を挙げて御用意させていただいておりますので、ぜひともお楽しみいただきたいと思います。

今後とも防衛省・自衛隊の仕事に御理解をいただき、防衛省・自衛隊を愛していただけるよう、私どもも頑張ってお参りたいと考えていますので、よろしくお願いたします。

#### 【司会】

それでは、第1部の講演に移りたいと思います。

講演のテーマは「我が国周辺の軍事情勢と西部航空方面隊の役割」、講師は、航空自衛隊西部航空方面隊司令官 丸茂吉成空将です。それでは丸茂司令官、よろしくお願いいたします。

#### 【丸茂司令官】

皆様、こんにちは。西部航空方面隊司令官の丸茂吉成と申します。

本日は、休み明けの月曜日、大変お疲れのところ、またお足元の悪い中、この様に沢山の方にお集まりをいただきまして、誠に有難うございます。

さて、今日のテーマですが、先程出ておりましたとおり、我が国周辺の軍事情勢と私が担任しております西部航空方面隊の役割ということです。

西部航空方面隊というのは、皆さん殆ど馴染みのないところだと思います。航空自衛隊は、日本の空を北・中・西部、そして南西部という四つに分けて担任をしております。西部航空方面隊は、九州全てと中国地方、そして四国、その周辺を担当する部隊になります。西部航空方面隊の特徴としては、朝鮮半島に近く、中国、東シナ海等を担任している部隊です。

それでは早速、周辺の軍事情勢のトピックを取り上げて、お話をさせていただきます。

まず、日本の周りに色々な線が書いてあります。青い線はロシアで、主に軍用機の代表的な経路、赤い線は中国、黒い線は中国の軍艦が通っているところで、この数が非常に多くなっています。現在、安全保障に関する法制の議論が国会で行われておりますが、その中で「我が国を取り巻く周辺の情勢が非常に厳しい」ことの代表例として、こういった活動に対して航空自衛隊の緊急発進の数が増えています。

ロシアや中国の軍用機の飛んでいる経路がこの様にあり、これに対して航空自衛隊は、この近くですと、築城基地から戦闘機を発進させて領空に入らせないような活動を行っております。その状況につきましては、後程詳しくお話をさせていただきます。ここでは、日本の周りにはそういった沢山の飛行機が飛んでいる、我が国の領空に近づいてくる飛行機が多くいるということをお知りおきいただければと思います。

続きまして、ここからは最近、日本の国防の情勢が急激に厳しくなり変わっていることを、幾つかの例で具体的にお話しさせていただきます。

まず、日本の安全保障にとって大きな問題点の一つであります北朝鮮ですが、皆様も御記憶のとおり、人工衛星と称するロケット・ミサイルを打ち上げております。平成24年4月、それから12月12日に発射しました。この24年12月12日は特に御記憶にあると思いますが、沖縄の上を通り過ぎて、フィリピンの東洋上まで飛んでいます。このとき、陸、海、空の自衛隊は沖縄に部隊を配備しまして、万が一の事態に備えていました。北朝鮮は、こういったものと併せて核実験を行っているということで、ミサイルと核が合わさることによって、我が国の安全保障上、非常に大きな脅威になります。北朝鮮は、こういったミサイル実験を非常に頻繁に行っています。

さらに最近では、潜水艦からのミサイル発射実験をしていると言われております。それが、なぜ問題なのかといいますと、例えば、北朝鮮のある施設からミサイルを撃つ、撃ちそうだという情報が入ると、北朝鮮から日本まで届くのに10分程度かかります。その間に撃ち落とすことができます。ところが潜水艦というのは、いつ、どこにいるか分かりません。日本の近くまで来て撃たれると、対応する暇がなくなってしまうということで、潜水艦から撃つミサイルは大きな脅威となります。まだ実用には程遠いと思いますが、このような実験を北朝鮮は行っていると言われております。

続いて、ロシアです。先程、青い線がロシアの軍用機が通っている跡ですと申しましたが、このように日本を1周するような飛行も行います。平成25年3月、爆撃機2機が日本を周回とありますが、これだけではなく、少ない時で年に1回、多い時で2、3回、こういった活動を行っています。その他、1周しなくても日本海側だけの時などもあります。何故このようなことをするのかというと、それはソ連が崩壊し、ロシアになってから国全体が非常に疲弊しました。その後、経済も回復し国力も増してきた中で、軍事的にも世界で、強いロシアを復活させるために、この様な力を見せつけるような飛行を始めたのだと言われております。これは日本の周りだけではなく、ヨーロッパやアメリカに対しても行っ

ています。同様に、ヨーロッパやアメリカの空軍は、戦闘機を発進させて領空に入れないように、こういった飛行機の監視を行っています。

ただ、これは国際法の観点から見たときには違反ではありません。ここに線が入っていますが、これは領空・領海の線です。国土から約22キロ、12海里と言いますが、そこを結んだ線が領海と言われるものであり、領土と領海の上空が領空と言われています。ここに入らない限り、誰がどういう飛行をしようが自由です。それを邪魔してもいけません。ですから、航空自衛隊の飛行機は、領空に入られそうになるのを防ぎ、そして相手の邪魔にならないように監視をし、領空に入られそうであれば領空に入るなという注意を与えることになります。

ところが、領空の外を飛ぶのは自由ですが、領空の中に入ることは重大な侵犯行為になります。平成25年2月7日、ロシアが領空侵犯を行いました。これは36回目ですが、7年ぶりでした。それ位、領空侵犯というのは起こらないものです。何故かという、領空侵犯をするということは、国際法上、非常に重大な違反になると言いましたが、結果としてどの位、重要なことになるかと申しますと、領空に無断で入った場合、撃墜されることがあります。1983年、大韓航空機撃墜事件というのがありました。ソ連の上空を勝手に飛んでしまった大韓航空機がソ連の戦闘機から撃墜されたのです。たとえそれが民間の飛行機であっても、無断で領空を通ると、それくらい重い侵犯という違反行為とみなされることになります。日本人28人を含む約270名の方が犠牲になり、国際的な非難もありましたが、人道的な非難であって、国際法的にはソ連を責めることはできませんでした。

では、何故、領空を守らなければいけないのか。アメリカで起こりました9・11の同時多発テロを思い出していただくと理解しやすいかと思います。飛行機というのは、こんな大きな被害を生じさせることができる。飛行機は速いので対応する時間がありません。悪意を持った飛行機がいるとすると、その飛行機が戦闘機であれば時速1,000キロ出ます。1分間に15キロ動きます。領空は22キロですから、領空の中に入ってしまうと数分で国土に到達します。例えば、東京に行き国家中枢を襲おうと思ったら簡単にできる訳です。ですから、領空侵犯は非常に重大な違反行為ということが、国際的な常識、お約束ということになります。

こういった領空を守る活動をするのは、航空自衛隊だけです。警察でよさそうですが、残念ながら、航空警察というのは、私の知っている限り、どの国にもありません。それは

おそらく、相手となる飛行機が基本的には軍の飛行機が多く、また、組織を維持するのに非常にお金がかかるということで、地上では警察、海上は海上保安庁がありますけれども、空では航空自衛隊が平時から有事に至るまで、一括してこの活動を行っていると考えられます。

次に、中国です。尖閣諸島の問題、これも連日のように伝えられていますが、平成24年9月11日に尖閣諸島を国有化して以降、中国の公船が領海に侵入し、そして日本の主権・主張を認めずに、これは中国の領土だとアピールしています。多い時は、月に延べ28回、最近では減ってきていますが、それでも今年の12月の段階で数回このような活動をしています。御注目いただきたいのは、「領海侵入」ということです。先程の領空は「侵犯」でした。言葉のニュアンスが表すとおり、領海には無許可で入ってもいい訳であります。これは歴史的なものです。海は領海の中を真っすぐ最短距離で通り抜ければいいというのが国際的な約束です。その国際的な約束は軍艦でも通用します。ですから、中国の軍艦が日本の領海の中を真っすぐ何もせずに通っていくのは国際的に認められます。ところが、この船が領海の中に入ってウロウロする行為は問題となります。更にもっと厄介なことが、領海の中でウロウロする船が民間の船であれば、例えば、船を「止める」、「中を確認する」、「拿捕する」といったことができますが、国が使用する船、つまり海上保安庁のような船や軍艦には、領海の外に出ていってくださいと呼びかけることしかできない、これが海の世界のお約束です。よって、このように領海に入り、ウロウロするという行為が行われます。領海が「進入」、領空が「侵犯」と言われているのには、このような違いがあります。

次に中国は、尖閣の領空を侵犯します。先程もお話したとおり、非常に重大な行為です。平成24年12月13日、中国の飛行機が領空を、日本から見れば「侵犯」ですが、彼らにしてみれば、この領空侵犯というのは重い違反行為であるが故に、逆に自分たちはここをパトロールしているが、日本はそれに対して有効な対応をしていないというアピールになるということです。何故、航空自衛隊は、この時に緊急発進、いわゆるスクランブルができなかったのかというと、中国の飛行機が見えなかったのです。見えないと申しますのは、航空自衛隊は全国28カ所でレーダーを使い、日本の空の周りを見張っていますが、レーダーでは水平線から下は見えません。沖縄本島にレーダーがありますが、尖閣諸島までは約400キロの距離があるので、飛行機が低いところを飛ぶと見えない、すなわち緊急発進できないため領空侵犯されたということになります。

それでは、日本として非常に問題があるということで、早期警戒機E-2Cという飛行機を飛ばして上空から監視をし、「領空侵犯」をさせないようにしています。これ以降、一度も「領空侵犯」はさせておりません。また、12月13日、この日は非常に特徴的です。最初にお話した北朝鮮のミサイル、あれが平成24年12月12日です。ミサイルの発射が終わって、日本の安全にも影響がなかったとホッとした次の日に、こういう「領空侵犯」がありました。

次は、海の話です。平成25年1月、海上自衛隊の「ゆうだち」という護衛艦に、中国の「江凱II」という軍艦が射撃レーダーの照射をしました。船や飛行機は、いつもレーダーを使っています。それは、他の飛行機や船にぶつからない様にする為や、色々な事情で使っていますが、この時は、射撃レーダー、弾を撃つ時にしか使わないレーダーを相手に当てたということです。これがどれ位、重要な違反行為かという、アメリカの国務省、日本でいう外務省の元高官は、「米国であれば反撃していた」と発言しています。こういったことも中国は行っています。

次に、また空の話に戻ります。平成25年11月、聞き覚えがあると思いますが、東シナ海防空識別圏を中国が設定しました。これに似たもので防空識別圏というのがあります。この防空識別圏が何の為にあるかという、領空を守るために領空に近づいてくる飛行機を監視し、必要であれば戦闘機を発進して、領空に近づいてくるようであれば入らせないような行動をすると定めているのが防空識別圏です。これはどこの国でも勝手に決められます。例えば、日本が北京に及ぶ防空識別圏を設定したとしても自由です。それ自体は何の問題もありません。ですから、中国がこれを発表したときに、尖閣が含まれていて、とんでもないという論調もありましたが、それは全く違反ではありません。問題なのは、この中を中国軍の許可を得ずに飛行する場合は、防御的緊急措置をとると中国が言ったことが問題なのです。領空から外の空、公の空は誰が飛んでいようが自由です。それを強制し、あたかも自分たちの領空であるかのような主張を始めたことが非常に大きな問題であり、各国が非常に強く反発しました。中国は1年後、報道官も言っていますが、いつも国防部隊がパトロールしているということです。

次に、1年程前ですが、海上自衛隊、航空自衛隊の飛行機に中国の戦闘機が、異常接近をしました。その距離は30メートルです。30メートルと言ってもピンと来ないかもしれませんが、皆さんが海外旅行や海外出張に行かれる際に乗る飛行機の横幅が50メートルから60メートルです。客席に乗っていただいて、翼の先の横位が30メートル、それ

位の距離まで戦闘機が近づいてきました。よく「異常接近」とか「衝突しそうになった」とか言いますが、そういうレベルの話ではありません。そして、もっと危ないのは、このパイロットが何を考えているか分からない、無線で話することもできない、また、ミサイルを積んで武装しています。空の上を自由に飛んでいいという権利を侵している訳ですから、危ないじゃないかと非常に強く抗議をしました。

更に8月になると、今度は南シナ海で米軍の飛行機に6メートルまで接近したということです。米軍の発表によりますと、6メートルまで接近した上に、次に米軍機が飛んでいる前を横切ったということです。横切ったということは、当然、進路妨害になる訳ですから、ますます衝突の危険が高まります。そして、横切った時に機体のお腹を見せていたということです。お腹を見せたということは、「自分は弾を積んでいるよ」、「武装しているよ」ということを見せつけるようなものです。更にバレルロールをしたとされています。仮に、これを米軍の飛行機だとしますと、その周りをぐるぐる回るのがバレルロールです。この写真はブルーインパルスという航空自衛隊のアクロバット飛行チームのバレルロールの写真ですが、毎日訓練している人達が1、2の3と言ってタイミングを計り行います。それを全く言葉も通じない、何を考えているか分からない他の国の者が行いましたので、アメリカは非常に怒りました。衝突したらどうするのかということですが、実は衝突した事例があります。バレルロールをやったかどうかは分かりませんが、2001年に、同じくこの南シナ海でアメリカの偵察機と中国の戦闘機が接触しました。アメリカの飛行機は海南島に不時着しましたが、中国がクルーと飛行機を返してくれないということがあり、アメリカは非常に強く抗議をしたわけです。

今まで日本を取り巻く安全保障情勢ということで、幾つかトピック的にお話をしてみました。最初に戻りまして、我が国周辺で中国やロシアの飛行機の活動が活発になり、それに対し、航空自衛隊が戦闘機を発進させる、いわゆるスクランブルというのが非常に増えているというお話をしましたが、そのニュース映像がありますので、御覧いただきたいと思います。

(映像上映) 1日に3回位、緊急発進を行っており、この近くでは築城基地から発進しています。周辺の軍事情勢、リスクが高まっていると言わざるを得ないということです。

ここから、南シナ海全域の話になります。ここで中国が、どのような活動を行っているかというのを見ていただきます。南シナ海は、中国、ベトナム、フィリピン、マレーシア、ブルネイ、台湾といった国がそれぞれ領有権を主張しています。そもそも、ここは世界の

4分の1の海上輸送の通過点だそうです。世界でも非常に重要な場所です。そして60年代から70年代に、海底資源があるということから各国がその領有権を主張し始めます。その中で、中国は各国と小競り合いを繰り返してきた訳ですが、代表的なものを三つ挙げさせてもらいます。

まず1番目、西沙諸島というところで、南ベトナムと中国がぶつかります。そして中国が勝利して、ここを占領します。1974年という年が一つのポイントになります。1973年、ベトナム戦争で多い時に五十数万人いた米軍が一気にベトナムから撤退します。ここにいわゆる力の真空というものが生じました。そのタイミングを見計らうように中国が出てきて、ベトナムと戦い、ベトナムのすぐ目と鼻の先のところを領有してしまいます。さらに、今度は中国からさらに離れたベトナムの近くでも衝突します。88年というのがポイントです。米国が撤退し、その後にソ連がこの地に影響力を伸ばして、アフガン紛争がありました。ところが88年にアフガン紛争からソ連軍が撤退し、そして、影響力が低下したと思われるタイミングで、このようにまた中国が出てきます。そして三つ目、今度はフィリピンですが、ミスチーフ礁という、まさにフィリピンの目と鼻の先のところで、フィリピンと対立して中国が領有します。アメリカとフィリピンの間には、集団的自衛権、米比相互防衛条約があり、フィリピンが攻められたときにアメリカが助けますというお約束があります。そして、60年代から70年代を通じて、ここで何かあったらアメリカはフィリピンを助けるということを明確に表明しています。ところが、フィリピン国内では、ベトナム戦争が終わり、共産主義の脅威も去り、フィリピン国内では、もう米軍は要らない、フィリピン国内にある米軍基地を返してもらって、米軍は撤退させようということが決まります。92年にそれが決まってアメリカが撤退して、95年1月にアメリカとフィリピンで最後の共同訓練がありました。その共同訓練が終わって、さらにアメリカの影響力が低下した2月にこのようなことが起こっています。何故アメリカは集団的自衛権、フィリピンとの条約があるのに助けなかったのかということに対して、米中経済安保調査委員会委員長のラリー・ウォーツェル氏がこんなことを言っています。「アメリカが介入しなかった理由はいろいろある。けれども、フィリピン自体が行動しなかった。自分たちで守ろうとしなかった。それが一番大きい」と。もちろんフィリピンはアメリカに助けるといっていますが、結局、アメリカは動かなかったということです。このように、南シナ海における中国の動きというのは、力の真空を見逃さない、そして自分たちの目的を達成する手段として、小競り合いをやってきたという実績があります。さらに言います

と、同盟というものは、自分たちで動こうとしないと機能もしないということがあると思います。

因みに、フィリピンと領有権を争ったといわれるミスチーフ礁の絵がこれです。本当にただの岩です。そこに中国軍の兵士が来てパラソルを立て、95年になると掘っ立て小屋のような物を造り、99年になると何やらコンクリートの建物らしきものが見えます。これが最近の映像です。このように南シナ海を占拠し、その他にも同じように埋め立てを行っています。先程のミスチーフ礁がこれです。それから、最初にベトナムと争ったと言われている西沙諸島、ウッディアイランドには3,000メートルの立派な滑走路があります。3,000メートルというと、北九州空港の滑走路と同じ位の長さです。ちょっと写真が小さくて分かりにくいかもしれませんが、今非常に話題になっているのがファイアリークロスです。これも元々小岩だったのですが、埋め立てて3,000メートル級の滑走路が着々と造られています。南沙、西沙における中国の埋め立て地は、東京ドームの170から200個分と言われています。それ位、一方的に力で国際的な秩序を無視し、自分たちの埋め立てを進めているということです。

その中国ですが、国防費が右肩上がりです。過去25年間で約40倍になっています。この10年間だけでも約4倍。一番下は日本の防衛予算ですが、ほぼ変わりません。日本が防衛予算を伸ばしたら、よく軍拡競争というようなことを言われますけども、日本が伸ばそうが伸ばすまいが、関係なく中国の国防費が伸びているというのが現状です。2014年の金額は17兆円から20兆円です。日本の防衛予算は年間5兆円です。既に3倍強、4倍位中国はお金を使っているということになります。因みに、一番国防費を使っているのは米国で、年間60兆円になります。こういった現実もよく見据えないといけません。これ位の国防費を使って、他の周辺の国々とは全く違う自分たちの主張を実行するようになっているというのが今の中国の実態です。

では、それに対して日本はどうするかということですが、政府の文書の中に防衛計画の大綱というものがあります。ここに三つの基本方針が掲げられています。

1番目、「我が国自身の努力（自分でやれることをやる）」、2番目、「日米同盟の強化」、3番目、「安全保障協力の積極的な推進」です。3番目は、1番目・2番目とはちょっと感じが違いますが、アジア・太平洋地域や国際社会と協力し、紛争などが起きにくい環境を作りましょうということです。

もう少し具体的に、陸、海、空自衛隊で何をしようとしているのか。特に、東シナ海の

尖閣の問題等について、どういう対応をしようとしているのかというお話です。

まず陸上自衛隊ですが、最初に部隊を配備することになっています。これまで陸上自衛隊は、沖縄本島にありましたがそれ以外の与那国島に至る地域に部隊はありませんでしたので、事前にこういったところに部隊を置きます。そして、何かあった時には日本各地から部隊を運ぶため、運びやすい部隊をつくります。3番目、奪われた場合には、これを取り返すように水陸両用作戦ができる力をつけるということをやっております。

次に海上自衛隊です。日本は海に囲まれていますので、例えば島を取ろうとすれば、海を渡ってくるので、海でそれを防ごうという考えから、護衛艦の数を増やすということですね。とはいっても予算の問題や乗員数も決まってくるので、小さくても色々なものに使えるように造ります。潜水艦についても、海の上で活動するためには、水中をしっかり押さえておかなければいけないということで、潜水艦の数を増やしましょうということをしています。

最後に航空自衛隊ですが、先程の映像でもありましたが、那覇基地の緊急発進が非常に増えています。ここに飛行機の絵が描いてありますが、もう一個、この近くの築城基地というところから持っていきこうということで、数を増やします。その築城基地には三沢基地からF-2という飛行機を持ってくることになります。それから、先程の空を飛んで上から監視する飛行機の配備をしています。こういったことをして、防衛の体制をつくっていきこうとしています。

そういったハード面の話だけではなくて、次の様な活動もあります。先程の三つのアプローチの最後に、色々な国と協力するという話をしましたが、中国とももちろん行います。海空連絡メカニズムの目的は、不測の衝突回避のための、いわゆるホットラインです。飛んでいる飛行機、もしくは船同士で何かあった時に通話をして間違いがないようにしましょうというものを作ろうということで、現在、交渉中です。

ちょっと話を柔らかくしましょう。自衛隊では女性が活躍しています。航空自衛隊には、25の専門の仕事があるのですが、戦闘機のパイロット以外、全てに女性を配属しています。特に人気なのは、客室乗務員です。航空自衛隊は、政府専用機も運行しており、ここで勤務するのが一番人気です。日本航空さんで教育を受けて、しっかりと対応しています。

最後に西部航空方面隊の話を簡単にします。西部航空方面隊は、戦闘機を持っている部隊が二つあります。宮崎県にある第5航空団と、福岡県行橋市の南にある築城基地の第8航空団。それから、色々な所にレーダーを置き、空を監視している部隊、ペトリオットと

いう地対空ミサイルを持つ部隊等、他に幾つかあります。また、この後、皆様に音楽を聞いていただく西部航空音楽隊という部隊があります。

レーダーを色々置いていると言いましたが、この黄色で書いてある所が、いわゆるレーダーを配置している基地です。そして、水色で書いてある所が戦闘機、青色が地対空ミサイルのPAC-3のある所です。このレーダー基地というのは大変重要で、とにかく日本にミサイルが飛来して来るのをできるだけ早く見つけるために、本土から離れた離島、もしくはできるだけ高い所から見るために山の上にあります。航空自衛隊というと、戦闘機を思い浮かべますが、実はこういったところで24時間、365日、毎日勤務をしてくれている隊員達があります。その中の一つ、対馬の海栗島というのを紹介します。まず対馬ですが、博多まで150キロ、釜山まで50キロです。その対馬の一番北にあります。更に、この対馬の本島から離れた小さい島には航空自衛隊のレーダー基地しかありません。対馬もよく離島と言われますけれども、私達は、離島の離島なので「二重離島」と呼んでいます。ここに百数十人の隊員が勤務していますが、ここに行くには橋がない。民間から専用の船を借り上げて渡っています。対馬には、こういう「二重離島」が六つあるそうですが、人が住んでいる島で橋がないのはここだけです。とにかく狭くて、平らな場所が殆どありません。ただ、こちらにあるように、対馬の本島側から海栗島を見ると、すぐ近くに韓国が見えます。この様に展望台があり、ここに韓国の方々が沢山観光でいらっしゃいます。問題は、この展望台の中に双眼鏡が付いていまして、釜山を見ようとすると、レーダー基地の中が見えてしまう事です。航空自衛隊というと皆さんは戦闘機を想像されますけれども、勤務をしてくれている隊員が24時間頑張ってくれています。そこで得た情報により、築城基地から隊員が、緊急発進を行っています。

お話ししましたとおり、我が国周辺の安全保障環境というのは、ここ3、4年で非常に大きく変わっております。そして、過去の歴史からもそうですが、残念ながら紛争といったものは、一方が望まなくても、もう一方がそれを欲すれば起こり得ることが事実だと思います。そして、日本の周りには、力の真空を見逃さない小さな戦いや紛争、小競り合い、こういったことを自分たちの目的達成のための手段として行ってきた国があります。また、非常に莫大な国防費をかけている。それも右肩上がりではげ続けているという現実を考えていただきたい。これに日本が独力で対応することは、今後、一層困難になっていきます。物理的にも、財政的にも難しくなっていくと思います。

では、その日本のリスクに対して、どうするのかというと、政府の方針にもありましたように、第一に「自分の努力」。少なくとも、日頃から領海、領空を守る活動を確実にしておくこと。自分たち単独で対応できる位の能力を持っておくこと。その上で、足りない部分は同盟で補っていくというのが二つ目のアプローチということになるかと思えます。ただし、世界最強と言われる、もしくは60兆円という軍事予算をかけている米国であっても、これが同盟として機能するためには、先程、フィリピンの例を出したとおり、まず自分たちの努力を行うことが大事なのだと思います。自らの努力と同盟、こういったものによって勝てる力を養っていく。

当然の事ながら、いかなる紛争であろうと、対立であろうと、損失を伴います。昔から「百戦百勝は善の善にあらず」という孫子の言葉があります。「戦わずして人の兵を屈するが善の善なり」。その通りだと思います。目指すべきは抑止というものになるかと思えます。また、戦うことと戦いに備えること、これは明らかに違います。戦いに備えることと戦うという判断をすること、日本は民主主義の国家ですから、内閣の承認が要ります、国会の承認が要ります、皆様の承認が要ります、そして初めて戦うということが決心されます。抑止力を高めるといふ事と、戦いに備えるといふ事について、より一層、深く一人一人が考えておく必要があるのではないかと思います。

以上で私の話は終了させていただきますが、最後にもう一点だけ。

自衛官の定年は50歳半ばです。一部の人は20代で定年を迎えることとなります。こういった人たちの再就職を私は何とかしなければならないという問題があります。因みに、航空自衛隊でいいますと、50代半ばで定年する人、20代で定年する人の一部は25ある専門職の隊員です。飛行機というと専門的ですが、隊員の特技の殆どは皆さんが勤務されている環境で使う技能と一緒にです。福岡で定年退職を迎える人間も多くいますので、ぜひ、再就職についても御理解いただければと思います。会場出口のところでパンフレットをお配りしておりますので、ぜひご興味のある方、何か一つ情報があればお知らせいただければと思います。

以上で、私の前座の部分を終了させていただきます。どうもありがとうございました。

## 【司会】

丸茂司令官、どうもありがとうございました。

ここで休憩の時間をとらせていただきます。第2部の西部航空音楽隊のミニコンサート

は演奏準備の都合がありますので、19時45分を目途に始めさせていただきます。

それでは、第2部の開始時間までにお席にお戻りくださいますよう、よろしくお願い申し上げます。

( 休 憩 )

【司会】

皆様お待たせしました。19時45分になりましたので、第2部の西部航空音楽隊ミニコンサートを始めさせていただきます。

本日は、「未来へ ～永遠の蒼空～」と題しまして、力強くも美しい音色をお楽しみいただきたいと思います。

第2部 西部航空音楽隊 ミニコンサート (約45分)

「未来へ ～永遠の蒼空～」

《指揮》

西部航空音楽隊長 浦川 薫 1等空尉

《演奏プログラム》

- (1) 行進曲「蒼空」・・・・・・・・・・・・・・・・・・ (和田 信)
- (2) 見上げてごらん夜の星を・・・・・・・・・・・・・・・・ (いずみ たく)
- (3) 麦の唄・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ (中島 みゆき)  
(NHK連続テレビ小説「マッサン」メインテーマ)
- (4) ひこうき雲・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ (荒井 由実)  
(映画「風立ちぬ」メインテーマ)
- (5) 蒼空遠く・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ (高山 実)  
(航空自衛隊歌)
- (6) シャドウ・オブ・ユア・スマイル・・・・・・・・ (ジョニー・マンデル)  
(映画「いそしぎ」メインテーマ)
- (7) デサフィナード・・・・・・・・・・・・・・・・ (アントニオ・カルロス・ジョビン)

【司会】

西部航空音楽隊の皆さん、どうもありがとうございました。

素晴らしい演奏をしていただきました音楽隊の皆さんに、もう一度大きな拍手をお願いします。

本日の全ての予定が終了いたしました。これもちまして、九州防衛局主催の第29回防衛問題セミナーを終了させていただきます。本日は、長時間にわたり聴講していただき、誠にありがとうございました。

お手元の「アンケート用紙」につきましては、出口の回収ボックスに投函していただきますよう、御協力のほど、よろしく願いいたします。本日は、ありがとうございました。

— 了 —